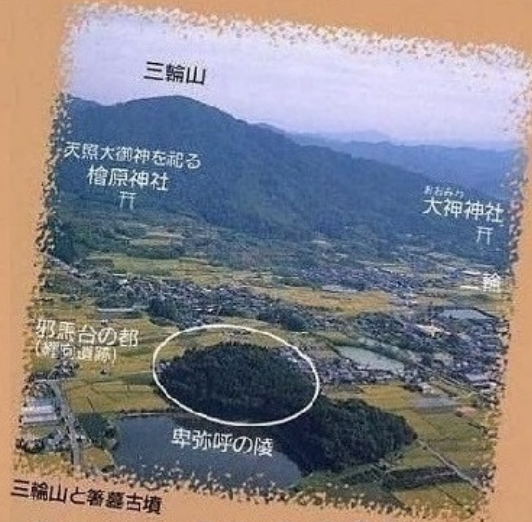


やま と

邪馬台 三国志

歴史物語のあらすじ



神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

邪馬台国史が見えた 邪馬台国時代の歴史を物語に

中国の三国志、日本の戦国時代・幕末をはるかに凌駕する世界に誇れる歴史です。

前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天之国、オロチ巖之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が立て続けに興った。

二世紀後半、伊弉諾の御世、畿内勢が謀反して大乱が勃発した。倭奴国王朝は瓦解し、日向に天照大御神（日神）を仰ぐ高天、大倭に天照大神（日神の婿養子）率いる邪馬台国に分裂した。

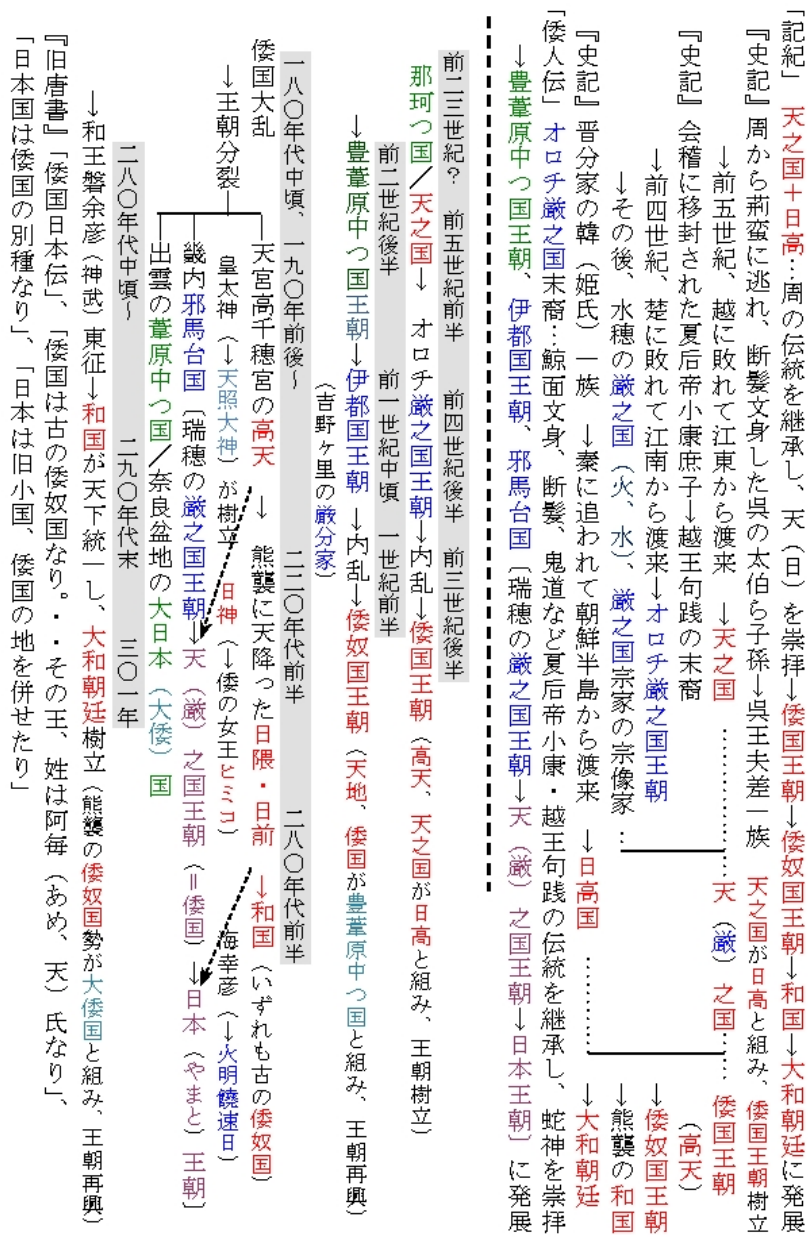
二二〇年代、日神は大倭に遷座して、倭の女王ヒミコに共立された。

三世紀後半、日向から東征した磐余彦（神武）が火明鏡速日（火瓊瓊杵の兄、海幸彦）の建てた日本朝を倒し、橿原に大和朝廷を開いた。

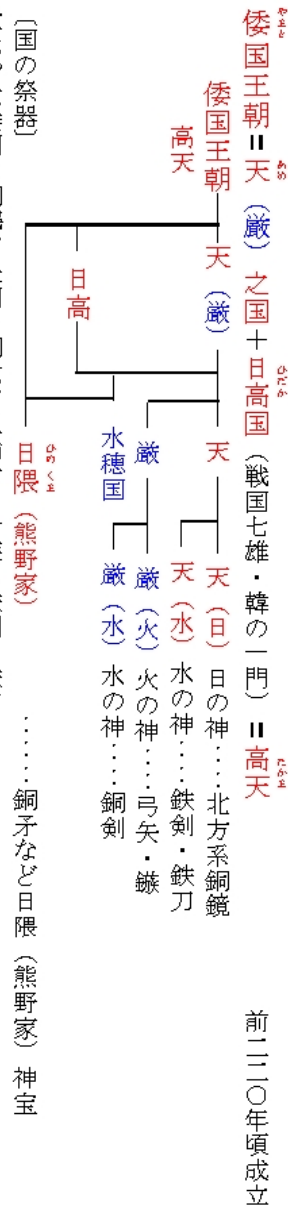
王朝の変遷



大和朝廷の成り立ち

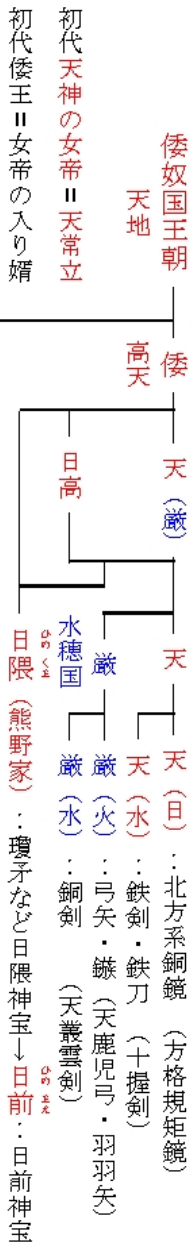


◇倭国／倭奴国の国のかたち

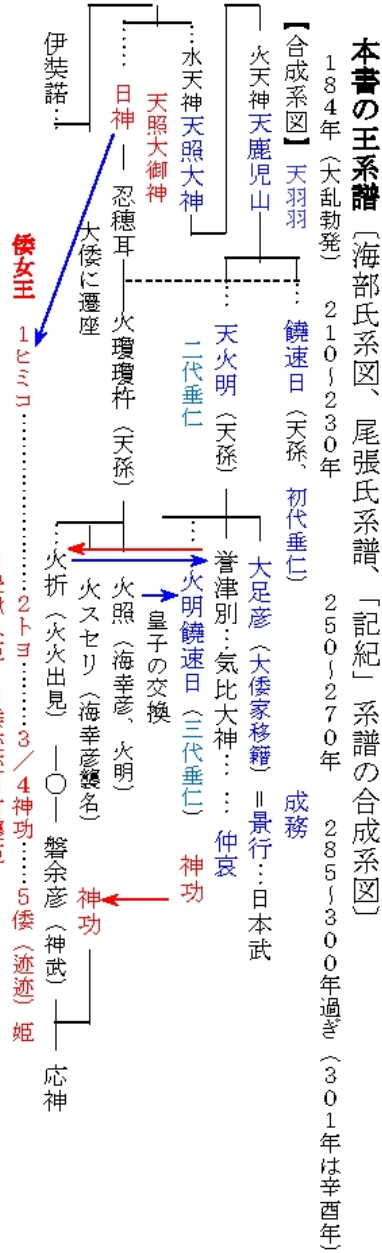


〔国の祭器〕
 太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀
 〔上古の祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、倭之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他
 『晋書』や『魏略』逸文、「(倭人は) 太伯の末裔と自ら言う」

倭奴国王朝 倭十豊葦原中つ国 天地 倭国 天(倭) 倭之国王朝 天(倭) 倭之国王朝 天(倭)



〔国の祭器〕
 太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀
 〔上古の祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、倭之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他



◇ 『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ

縄文中期、五帝期黄帝につながる東の天帝の児が北九州に渡来して在郷の海神大神(天帝子孫)・鰐族らの上に立ち、玉八つ(死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細玉、羽太・足高・赤石の玉)、熊の神籬など玉つ宝十種を奉って、地の神を称える那珂川中流域(福岡市)に建てた。黄帝の政を踏襲してきた彼らは、九州全域を支配するや、仁徳・慈愛を謳いながら東西南北四方に忠臣の四カ国を配置し、神仙の国(神国)づくりを励んできた。その四カ国は、后土末裔と自負して玄界灘沿いを守る閩見国(黄泉国)、地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、炎帝(神農氏)子孫と語る南の火の国と配下熊族(熊襲)、筑紫平野以西に展開する海神大神だった。ついで水田稲作の始まる前五世紀前半、呉の太伯(周大王古公亶父の嫡子、姫氏)・呉王夫差ら子孫が九州西北に渡来して、日鏡・奥(瀛)つ鏡・辺つ鏡で以て天(日、太陽)を祀る天之国を興した。両者は天地と称して手を携え、摂津六甲山南麓、奈良盆地、琵琶湖南部まで進出した。前四世紀後半、今度は夏后帝少康庶子・越王句踐につながる越オロチ族が薩摩半島に大挙襲来して那珂川に襲いかかり、蛇神を崇めるオロチ族(博多区)に打ち立てた。敗れた那珂川国勢は、閩見国・杵築国と共に辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国は、オロチ族配下に組み込まれ、越流米づくりを強いられてきた。

その後、オロチ族の国王朝は、鰐族・山祇族・三嶋族らを従える海神大神と手を組み、瑞宝十種を天璽に奉る敵之国家の宗像家を共立するや、北陸や東海に繰り出して水田稲作を押し広げたが、それ以東では北の縄文勢と小競り合いを繰り返すばかりで、一歩も前進できなかった。

その瑞宝十種は、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、軍団を統率する八握の銅劍、船団を指揮する蛇の領巾などだった。この内の玉五つは那珂つ国から、鏡二面は天之国から強奪した神宝だ。秦が天下統一した前三世紀後半、天之国は半島から渡来した韓系日高国と組んでオロチ殿之国王朝を倒し、倭国（高天）王朝と銘打って東海まで進攻したが、縄文勢や越オロチに阻まれた。この間に、前王朝一派が火神の炎帝一門を担ぎ、水神が火神を奉る殿（火、水）之国を建てた。この国のかたちこそ、水穂（水火、みずほ）国であり、国の目指すところも「水田稲作に勤しむ国」だった。天之国はこの勢力を挙げて抱え込んだ結果、天（殿）之国とも呼ばれた。

その後、天（殿）と日高は共通の分家、日隈（熊野家）を共立して、倭王の警護や熊本平野以南の統治・開拓の重責を背負わせた。その上で、これら三家による支配体制に切り替えた。

熊本平野に移封された日隈は、熊族が祖霊を祭ってきた神宝、即ち日鏡・玉三つ（羽太・足高・赤石の玉）・熊の神籬などを召し上げ、日隈（熊野家）神宝として奉ってきた。この内の日鏡は熊族が天之国から奪った神鏡、玉三つは那珂つ国から取り上げた玉器、熊の神籬は取り戻した神宝だった。

その後も、倭は太氏ともども銅鐸で先祖を祀る大倭家を建て、筑紫国東部の国東に策封してきた。そのまた後、出雲に移封された大倭家は、倭が河内から奈良盆地に進めた副都の政や軍事を取り仕切る家柄に抜擢された。それ故、奈良盆地は大倭国と呼ばれ、その分家は東海



の津々浦々まで広がった。

前二世紀前半、漢朝内部で跡目争いが起こり、これに関わった漢の王族が倭に流れて来た。時の倭王は、国東に豊なる王家を興すと、在郷の中つ国勢、海神一門に分散する鰐族や海部家を配下として分け与えた。この経緯から、豊国は高祖にあやかり、亀や火神を尊んできた。後世、丹後や尾張に国替えされて大国となる海部家は、豊系火神や鰐族長を担ぎ続けたり尊ぶなどしてきた。これら倭三家、大倭家、豊国に君臨する倭王は、日高と天（厳）から交互に選ばれた。両家が倭王を出せない事態に陥ると、豊国または日限の皇子が本家に養子入りして、倭王に立つとされた。その倭王は政の大事が生じた際は、日高と天（厳）の重臣らを一堂に集めて協議させてきた。

その協議の場は、高天の原と呼ばれた。高天原の高は日高、天は天之国や天（厳）を意味した。その当時から、日の神を祀る祭場では、倭王は祭壇正面の玉座（日前）に、日高王は倭王左の心もち高い座（日高）に、天（厳）王は玉座背後の正面（日向）に、豊国王は倭王の右に座をとった。日限王は最後列の片隅（日隅）に畏って控えてきた。それ故、日限は熊野家とも呼ばれた。

次に、豊葦原中つ国王朝（豊国十厳分家の葦原家中つ国）が興った。この王朝の立役者天叢雲は、宗像家を宗家に祭り上げて瑞宝十種を奪うや、八握剣を天叢雲剣と改名して天璽に奉った。

続いて、吉野ヶ里の厳分家が糸島平野怡土に進出して伊都国王朝を開いた。この創始者も天叢雲と語り、新たに鑄た有柄銅剣を天叢雲剣と命名して天璽に奉った。その際、出雲に追放された豊葦原中つ国は、宗像家に瑞宝を返上して不義を詫び、中興の暁には宗像家宗女の共立を誓った。

紀元前後になると、王朝重鎮の天之国が宗像家を外戚に迎えて、勢力を盛り返してきた。

漢朝が再興された一世紀前半、倭国は豊葦原中つ国と盟約して、天地なる倭奴国王朝を怡土に樹

立して、北陸・東海、関東・仙台平野まで領土を押し広げた。

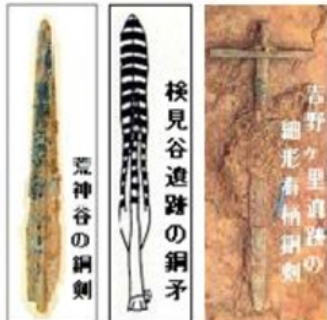
『日本書紀』、「一書に曰わく、天地初めて判るときに、始めてともに生づる神有す。国常立尊と号す」

この立役者天常立は、初代女系天神に昇って怡土井原に天宮するや、豊葦原中つ国王国常立を婿に迎えて倭王に据え、日高王高皇産靈に布都斯魂の十握剣を託して王朝守護を命じた。ついで日隈王に瓊矛など日隈神宝を授けて身边警護させ、自身は天地を具現した方格規矩鏡を天璽として奉ってきた。

五七年、倭(奴)国王の使節が漢に朝貢して光武帝に見え、金印「漢委奴国王」などを賜った。

一七〇年代、日隈の伊奘諾は、六代女系天神天尾羽張神から七代倭王に抜擢されると、神璽の瓊矛など日隈神宝、十握剣を賜り、天神宗女の向津姫と素戔嗚、五皇子、宗像家三皇女の帝王教育や養育を押し付けられた。宗像家の田心姫が瑞宝を持参してきたのは、言うまでもない。

一八〇年頃、向津姫は伊奘諾太子で副都唐古を治める豊受皇太神(豊葦原中つ国王)に駆け昇ったマガダ国大王、大穴持、山王、牛頭天王、大國主、天照皇太神、熊野櫛御氣野、熊野権現(を婿養子(夫婿)に迎えた。



当時の向津姫は十代後半、皇太神は三十代半ばだったろう。

この二、三年後、東方の畿内が騒然としてきた。その時、伊弉諾は天神から東方建て直しを詔されるや、九州勢・中つ国勢・豊受皇太神ら大軍を率い、畿内勢の武力鎮圧に乗り出した。

その最中に、皇太神が三輪氏ら畿内オロチ勢、大海神、鰐族、出雲佐太国、尾張・丹後の両海部家らと共に謀して、「オロチ敵之国王朝を再現してみせる」と唱えながら瑞穂の敵之国王朝すなわち邪馬台国を建てるや、大蛇の水天神天照大神とも天叢雲・天御中主の再来とも称して大倭唐古に都した。天照大神妃の瀬織津姫は、摂津広田国(西宮市)に本陣を構え、西国勢の東征に備えた。

〔瀬織津(せおり)姫〕、『倭姫命世記』や『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』には、「皇太神宮荒魂、一名は瀬織津比咩神」、「天照荒魂、亦の名は瀬織津比咩神」とあるそう。

〔廣田神社〕(西宮市大社町)、主祭神は、天照大神荒魂、撞賢木敵之御魂天疎向津媛命、瀬織津姫とする説もある。神功は新羅征伐の帰途(二八〇年代後半)、務古水門(武庫川河口)で天照大(御)神の神意を卜ったところ、御心に沿って祀り替えた。(廣田神社の由来)

伊弉諾は、妃伊弉冉が摂津岩屋邑(神戸市東部)で拉致されたと知るや、岩屋邑を急襲したが、撃退された。その間に、妃は出雲闇見国に連れ去られた。彼は出雲勢を味方につけるべく最新式八握剣(中細銅剣)四百を出雲中に配布した後、十握剣、瓊矛など日隈神宝をかざしながら闇見国(月夜見国、黄泉国)に攻め入ったが、大敗して向津姫・素戔鳴らと共に熊襲に逃れた。ここに日隈は没落し、倭奴国王朝も日向の高天系、大倭の邪馬台国に割れた。王朝の建国以来、副都を支えてきた大倭国は、これを契機に主家から離れて敵に回った。

以後、皇太神は新たに鑄た八握の天叢雲剣(中細銅剣)を天璽として持ち歩く一方、蓬萊郷・常世づくり、天竺直伝の仏法流布に入れ込んだ。嫡子天鹿見山(天羽羽)も、天鹿見弓・羽羽矢を天璽として火天神に立った。この天下人交替は、後漢書に大乱、倭人伝に倭国乱れると記された。

一八〇年代末、倭の国名を奪われた向津姫は天之国、高天と語る他なかったが、日神の天照大御神に担がれるや、臣下らが日の像の八咫鏡二面（日前神（日前鏡）と伊勢大神（真経津鏡））、三角縁神獸鏡）、及び日矛（熊野櫛御氣野の神像）を鑄造して奉った。彼女はこの真経津の八咫鏡を天璽と定めて高千穂宮に天宮し、倭（奴）国王朝再興に動き始めた。

『古語拾遺』、「思兼神の議に従いて石凝姥神をして日の像の鏡を鑄しむ。初度に鑄たるは、少意いさかこころに合あわなず。〔是、紀伊国の日前神。〕次度つぎに鑄たるは、その形美麗うらわし。〔是、伊勢大神。〕」

『日本書紀』、「石凝姥神を冶工として、・・日矛を作らしむ。是、紀伊国に坐す日前神なり」一方、熊野家再興を急ぐ素戔嗚は、日前鏡、日矛など熊野家神宝、布都斯魂の十握剣を日神から賜り、養子五十猛（天日槍）を連れて新羅に出走した。その後、奥出雲に潜入して布都斯魂剣で八岐大蛇（天照大神親子）を討ち、二天神の天璽や火天神の児（饒速日と彦火明）を召し取った。

彼はそれらを日神に届けた後、豊葦原中つ国再建に奮闘したが、佐太国に養子に出した実子大己貴に邪魔された上に、日前鏡も奪われた。天日槍は素戔嗚の不遇を耳にして甲兵八千と共に播磨に襲来して大己貴軍に襲いかかったが、大敗して甲兵八千も、日矛など熊野家神宝も奪われた。

その後、大己貴が葦原中つ国建て直しに成功して、越（高志）のオロチ勢ともども西と北から邪馬台国を執拗に攻め立てた。防戦一方の天照大神は、妻の日神と手を組むのが最善と悟った。

二二〇年代前半、天照大神は妻の日神と語り、高天と邪馬台国を統一して、呉や新羅の外敵を追い払う方策で合意すると、高千穂宮に赴いて経津主、高皇産靈と語る一方、天孫饒速日（初代垂仁）に天璽の天羽羽矢、瑞宝十種を授けて大倭降臨を命じた。だが、彼は一年足らずで逝った。

次に忍穗耳を送ったが、大己貴に邪魔された。そこで日神と高皇産靈は、新造した布都御魂の十握剣を武甕槌に授けて出雲に派遣し、戦わずして大己貴に国譲りさせた後、日前鏡、熊野家神宝

を返上させた。高千穂宮で二神に見えた大己貴は、過去の不義を詫び、彦火明の養育を願い出た。そこで二神は南蛮撃退の任務、火天神に移籍した天孫火瓊瓊杵に天叢雲劍、日隈再興を祈願した八咫鏡(日前鏡)・日矛など日隈神宝、火天神の御子と印す天羽羽矢を授けて吾田降臨を命じた。その直後、天照大神は大倭に戻って天孫天(彦)火明に日高見国を建てさせ、丹後と尾張の統治、さらなる東の領土拡大を命じた。天火明(二代垂仁)は、武蔵・房総・常陸・陸奥制圧に赴いた。

同じ頃、日神一行も大倭に向かった。その途上で夫が急逝した。纏向上之宮に遷った彼女は、高天・邪馬台双方から倭女王ヒコミに共立されるや、鬼道で瑞穂の天神を祭る祭祀に、真経津鏡で日の神を奉る祭祀を覆いかぶせた天(嚴)之国王朝(倭)に模様替えした。それと同時に、瀬織津姫を自身の分身に取り立て、素戔嗚に全軍の指揮、大己貴に外交・都の警備を任せた。ついで豪族らに祝いの八咫鏡を配り、己の御霊として日ごと祀らせた。

大事を決する際には祭場を設けて、瀬織津姫を神憑りする巫女として侍らせる中で、天照大神の神託を請うた。すると、大神が彼女に神憑りしてきて口寄せした。素戔嗚はそれを詔として配下に下知した。女王と分身は鬼道に熱中したあまり、共に嚴之御魂天疎向津姫(媛)と呼ばれた。

その後、天火明は、日高見国を大倭纏向から千葉県市原市惣社に遷し、小纏向風の東都を開いた。

「倭人伝」、「倭国乱れ、相攻伐すること歴年、共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼という。鬼道に事え、年己に長大なるも夫婦なく、男弟ありて佐けて国を治む」、「女王国の東、海を渡ること千余里にして、また国あり(七里の渡し(東都)、皆倭種なり)」

〔神門(こうど) 五号墳説明板(千葉県市原市教育委員会)の要旨〕、「邪馬台国時代の三世紀になると、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡などでは、近畿や北陸、東海、北関東などの特徴を持った土器が出土し、東日本での拠点的な地域となりました。とりわけ、五号墳は纏向古墳群と同

様、前方後円墳が定型化する以前の特徴を備えており、三世紀前半の造墓と推定されます。

纏向型前方後円墳の提唱者、寺沢薫氏は研究報告の中で、纏向の石塚古墳や矢塚古墳、神門古墳群中の五号墳・四号墳、津古生掛古墳(福岡県)がこれに該当するとし、これ以外に、纏向地区の勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳、端陵(木花開耶姫陵、西都市)、白ヶ森古墳(福島県)など、中国の尺度に倣った規格と類型、畿内系土器を共有する出現期古墳が、出羽・陸奥・毛野・上総・信濃から伊勢・加賀・丹後・備前・備中・長門・伊予・九州にかけて散在すると指摘した。

一方の火瓊瓊杵は、笠沙に都して女神大山祇の娘、木花咲耶姫に婿入りして、日前鏡、日矛など日限神宝で以て先祖を奉る日限(日前)を再興した。その後、ヒミコは火瓊瓊杵の所持する天叢雲劍、日限神宝を取り上げると、紀伊に封じた五十猛(天日槍)に熊野家神宝として授けた。ここに、日限は熊襲に日前鏡を祀る日前、紀伊に日矛など熊野家神宝を奉る熊野家が並立した。

一二〇年代中頃、火瓊瓊杵は日向に遷都して西都(西都市妻、都万神社近辺)を開くと、国名を日前ひのまへと改名し、火照ほてる(海幸彦)・火スセリ・火折に恵まれた。この国は、倭人伝や記紀では投馬国、狗奴国、熊襲と記された。

〔都万(つま)神社〕(西都市大字妻)、祭神は、火瓊瓊杵の妻となる木花開耶姫。神社の近くには二人が新婚生活を送った八尋殿の跡や、姫が出産後に沐浴した子湯池があり、子湯郡の地名も残る。



同じ頃、天火明も蒼津別(火火出見)に恵まれた。それぞれの嫡子が成長すると、女王は天孫二人に対して、両家の絆を深めたいとして嫡子交換を命じた。その結果、三男火折が大倭に天降つて蒼津別に成りすまし、火火出見は火瓊瓊杵に養子入りした。

一三八年、ヒミコは洛陽に使節を送り、魏帝から金印・鉄刀二・銅鏡(方格規矩鏡)百などを賜った。同じ頃、海幸彦と火火出見が日前の太子の座を巡って争い始めた。敗れた海幸彦は、「これから先は、夜も昼も火火出見の官殿を守って仕えるから許してくれ」と平謝りして、命乞いした。

一四〇年代中頃、ヒミコと火瓊瓊杵が刃を交えて争い始めた。その最中に、天火明が女王の座を奪いにかかったが、失敗して尾張勢・東都の日高見勢ともども常陸や陸奥に遁走した。

「倭人伝」、「其の八年(二四七年)、太守王願、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼(ヒミココ、天孫火瓊瓊杵)と素より和せず」

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地(信太)は、もと日高見」

その後のヒミコは火瓊瓊杵と和睦してその見海幸彦に、饒速日と火明の名跡、火天神の御子と印す天羽羽矢、瑞宝十種を相續させて上之宮に参内させると、十握劍二振り、新たに鑄た八咫鏡(真経津鏡を型に取って鑄た天照御魂神、鏡作神社の御神体)を授けて、日本家を興すよう詔した。その直後、倭姫と共



に天照大神御霊と天叢雲劍、及び妃瀬織津姫御霊（天照大（御）神荒魂）を奉じて伊勢五十鈴宮に遷座し、夫が一刻も早く降臨してくるよう祈り続けた。（伊勢神宮の由来）

「垂仁紀」、「倭姫命、・・大神の教の随にその社を伊勢の国に立つ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮という。則ち天照大神の初めて天より降ります処なり」

〔**皇大神宮別宮 荒祭宮**〕、**主祭神は、天照大御神荒魂。**

二四〇年代末に女王が逝くと、火明鏡速日は十握劍二振り・八咫鏡を神璽として珠城丘陵に日本朝を開き、独り倭王に居座つたが、ヒミコの遺言を守らないことで素戔嗚勢の反発を招いた。

「垂仁紀」、「（二年）冬十月に、更に纏向に都つくる。是を珠城宮と謂う」

「倭人伝」、「卑弥呼すでに死し、・・更に男王を立てるに、國中服せず。こもごも誅殺し、千余人を殺す。ヒミコの宗女、耆与（台与）、歳十三なるを立てて王と為し、國中ついに定まる」

女王トヨ（豊鍬入姫）の晋朝貢（二六六年）後、彼はヒミコ陵を帆立貝形前方後円墳（箸墓）に造り変えると、方墳上で封禪しながらに郊祭して現人神の天神に昇り、天照国照彦火明鏡速日と語つた。ついで、天羽羽矢と瑞宝十種を天璽に奉つた後、日本大物主大神（日本と大神氏の最高位）に就任して倭奴国王朝再現に動き出した。

〔**鏡作神社**（鏡作坐天照御魂神社）（奈良県田原本町）、祭壇中央に天照国照彦天火明命を祀り、左右に石凝姥命と天糠戸命を配して外区のない鏡を御神体として祀る。社伝によると、

「崇神天皇六年九月三日、この地において日御像の鏡を鑄造し、天照大神之御魂となす。・・本社は其の（試鑄せられた）日像鏡を天照国照彦火明命として祀つた」という。

☆この日御像の鏡は、紛れもない三角縁神獸鏡（唐草文帯三神二獸鏡）だ。これと同型で、完壁な鏡が犬山市東之宮古墳からも出土した。

その直後、三代垂仁は、二代垂仁実子で、大倭王孝元に養子入りした大足彦に倭王を譲りたいと

伝えてきた。大足彦は纏向に舞い戻り、日代宮で即位式に臨んだ。後世、景行と諡された天皇だ。

「景行紀」、「(四年)冬十一月、美濃より還ります。則ち纏向に都つくる。是を日代宮と謂す」

同じ頃、高千穂宮(鹿児島神宮の地)に遷都した火火出見も、日前を和と改名して日本朝打倒、伊弉諾と日神の切望した倭奴国王朝再現、日隈・日前・熊野家の祭祀復興を声高に唱え始めた。

一七〇年代後半、火明饒速日(三代垂仁)は火火出見と交わした誓約を消し去りたい一心から、景行に熊襲(火火出見のこと)征伐を命じたが、景行は惨敗して日向高屋に六年間も幽閉された。

一八〇年代前半、仲哀も熊襲(磐余彦のこと)征伐を詔されると、神功・日本武・吉備津彦・武甕雷らを率い、日矛など熊野家神宝、神璽の布都斯魂の十握剣を奉じて檀日宮から撃つて出た。

この直前、火火出見の遺志を継いだ磐余彦は、高千穂宮(宮崎神宮の地)から東征を決断するや、東征途上で戦死する勇士を弔う八咫鏡(三角縁神獸鏡)を大量に携え、檀日宮を目指した。

その結果、仲哀軍が大敗し、神功・武甕雷らは日矛など熊野家神宝、布都斯魂剣を差し出して寝返った。熊野家神宝がすぐさま日前神宝に戻されたのは、言うまでもなからう。

その後、磐余彦は近江・紀伊・熊野を征圧して、敵将から布都御魂剣の献上、悲願の熊野家祭祀、紀伊秋月でも日前鏡、日矛など日前神宝を奉獻して日前宮祭祀を叶えた。(日前宮の由来)

〔日前(ひのこ)宮(日前神宮・国懸神宮)〕(和歌山市秋月)、素戔嗚と五十猛が祀られていた秋月には、日前神宮と国懸神宮が隣接して鎮座する。合わせて、日前宮とも名草宮とも呼ばれる。

日前神宮は日像鏡を御神体に、国懸神宮は日矛鏡(日矛十日鏡?)を御神体にする^{と伝わる}。

〔日前(ひのこ)宮(神宮の古記録)〕、「日矛・日前鏡の神宝は神武東征の折、天道根に託された。神武軍が難波に到った際、彼はこの祭器を奉じて名草宮に馳せ参じ、日前・国懸の神として祀った」

三世紀末、熊野を北上した磐余彦率いる本軍、外戚の大山祇・海神豊玉彦、海神三神ら諸軍が大倭磯城に攻め入って日本朝を倒すと、火明饒速日は天璽の天羽羽矢、瑞宝十種を差し出して帰順

を願い出た。磐余彦は自身の羽羽矢と比べ見て、共に火天神の御子と悟ると、彼の帰順を許した。この間、倭の女王は、豊鍬入姫↓倭迹迹日百襲姫↓気長足姫（神功）↓倭（迹迹）姫と続いた。日本滅亡後、磐余彦は景行を介して彼の兄日本武尊に対して、常陸・陸奥に遁走した日高見勢を説得して帰順させ、都に連れ戻すよう命じた。

「景行紀」、「二七年の春二月、竹内宿禰、東国よりかきもつり還もろて奏もろして言もろさく、『東の夷ひなの中に、日高見国あり。・・撃ちて取りつべし。』」

日本武は北伐途上の焼津で鹿狩り中に火攻めに遭ったが、伊勢神宮で倭姫から賜った天叢雲剣で枯草を薙ぎ払い、命拾いした。一息つくくと、彼は高皇産靈に感謝してお礼の言葉を申し述べた。

「この剣に一命を救われました。今より草薙剣と改め、高皇産靈御魂と拝してお仕えます」
任務を終えて尾張熱田に戻った彼は、妻の宮ス姫に神剣を預けた後、伊吹山に隠れ潜む賊の討伐に出かけた。（熱田神宮が草薙剣を奉る由来）

『古語拾遺』、「草薙の神剣は、まことに是天璽なり。日本武尊、かえりたまいし年に、留りて尾張の熱田社に在す」

〔熱田神宮〕（名古屋熱田区）、主祭神は、熱田大神。草薙剣をご神体とする。草薙剣（一説では天叢雲剣）は、大日如来（高皇産靈、一説では天照大神）の姿でもあるという。

明治以降、神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を依り代とした天照大神とされる。

三〇一年（辛酉年）元旦、磐余彦（神武）は神日本磐余彦火火出見と号して橿原に大和朝廷（和国が大倭国と共立）を開くと、伊勢神宮の八咫鏡・熱田の草薙剣を型に取って鑄た神璽の鏡剣を捧げ持ちながら、初代天皇（始はつ天天下之天皇）に即位した。

『古語拾遺』、「天富命、諸の齋部を率て、天璽の鏡・剣を捧げ持ちて、正殿に安き奉り・・・」

☆平安期になると、鏡剣の神璽は辛櫃に納められて天皇の身边に置かれ、次の天皇即位時に引き継がれた。『村上御記』などによると、

「内侍所(後の賢所)の辛櫃中には三面の鏡があり、一面は伊勢分身の『伊勢御神』、一面は日前神社の御正体らしき鏡、残る一面は定かでなかった。天徳四年(九六〇年)に内裏が焼失した際、『伊勢御神』は無事であったが他の二面は焼けて原型を失った」という。

剣も、壇ノ浦で入水した安徳天皇と共に海に沈み、新たな剣に換えられた。長い年月とともに神璽の扱い方も変遷した。鏡は別殿(賢所)で祀られ、神璽は剣と玉におき替わった。

同時に、大倭王開化の皇子・御間城入彦(崇神、初国知らしし天皇)を太子に指名した。ついで、

火明饒速日の児可美真手うましよに物部姓と布都御魂の十握剣を授けて、海幸彦がかつて火火出見に誓約した宮殿警護と大和朝廷守護を厳命した。冬十一月、可美真手は正殿に瑞宝十種を奉り、帝と妃の鎮魂を崇め鎮めて長寿を祈った。「物部遠祖宇麻志麻治(饒速日の児)を祀る石上神宮の由来」

〔石上神宮〕(奈良県天理市)、石上振神宮、石上布留神宮、石上布都御魂神社、石上布都大神社、

布留大明神と呼ばれてきた。主祭神は、布都御魂大神フツノミタマノカミ、布都御魂剣に宿る神霊。配神は、

布留御魂大神フツノミタマノカミ、瑞宝十種に宿る神霊、布都斯魂大神フツノミタマノカミ、天羽羽斬剣に宿る神霊、宇麻志麻治命ら。

『先代旧事本紀』、「冬十一月に、可美真手命は正殿の中に天璽の瑞宝を奉った。帝と妃の御魂を崇め鎮めて、長寿を祈った。御鎮魂祭は、これより始まり」

〔鎮魂祭(ちんこんさい、みたましずめのまつり)〕、宮中三殿の綾綺殿において、新嘗祭前日に天皇の鎮魂を祈る儀式。戦後、皇后や皇太子夫妻に対しても行われた。

〔魂振の儀〕、鎮魂の儀のあと、天皇の衣を左右に十回振ってとり行う儀式。これは天孫饒速日が玉つ宝をして、一から十の呪文を唱えながら、ゆらゆらと振っては招魂を願ったことに由来する。

三〇四年二月二三日、神武は鳥見山中に天地を具現した柄鏡形前方後円墳(桜井茶白山古墳)を

造宮して郊祭し、皇祖天神（天照大御神と高皇産靈）を天（共に日天神）に配して皇祖皇宗として称えると同時に、伊勢神宮の八咫鏡および熱田の草薙剣を二天神の天璽に奉った。

「神武紀」、「我が皇祖の靈、天より降りみて、わが身を光し助けたまえり。今、諸の虜すでに平けて海内事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝（皇天にしたがうこと）を申べたまうべし」、「靈時を鳥見山の中に立てて、皇祖天神を祭りたまう」

『古語拾遺』、「靈時を鳥見山の中に立つ。天富命、幣を陳ねて祝詞して皇天を禋祀り、群望を遍祓りて・・・」、「聖皇（天皇）の登極（天つ日継ぎしろしめ）して、終を父祖に受けたまい、上帝（五帝）を類り、六宗を禋り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、天

照大神（日神と高皇産靈）はこれ祖これ宗（皇祖皇宗）、尊きことならび無し」

☆儒教では、周文王は武王や周公旦と並び、聖人の代表例として崇められた。

☆鳥見山は、桜井市外山にある標高二四五坪の山である。

つまり、神武は高皇産靈が封禪を成したとしても道理に適うと見て、彼に代わって柴を勢いよく燃やす中で封禪さながらに郊祭し、その高煙が天に通じたところでお礼の言葉を申し述べるとともに、皇祖天神を天に配して皇祖皇宗に奉ったのだ。

この鳥見山から北へのびる尾根上には、四世紀初頭に造宮された日向型の柄鏡形前方後円墳が鎮座する。桜井茶白山古墳と呼ばれるそれには、樹齢千年の巨木からなる木棺が安置されていて、木棺内外に二六面の三角縁神獸鏡をはじめ、内行花文鏡・方格規矩鏡・画文帯神獸鏡・獸帯鏡、三種神器である曲玉・鉄劍、王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉などが副えられていた。

円墳上には土を盛った方形壇があり、その周りを底のない祭祀用壺が取り巻く。方形壇を囲む幅

一坪の溝から柱十本分の痕跡が、石室周辺からも大量の鏡破片や炭などが出土した。再調査により、出土した銅鏡片から八〇面以上の銅鏡埋納、及び四世紀前後の築造が確認された。

橿原考古学研究所はこの古墳について、「石室上に土の方形壇を築いて壇周囲に供物用の壺を並べ立て、ついで火を使った葬送儀礼を営んだ後に、直径三〇センチ、高さ二・六坪の丸太一五〇本で玉垣風に囲って聖域化した」と見立てる。

この儀式の拠りどころは五帝期の封禪や、成王を補佐した周公が成王に成り代って、后稷（周祖棄）を南郊に祀って天（農耕の天神）に配し、秋に新穀を奉った周礼、武王を明堂に祀って阜宗に配した周礼、さらに光武帝が漢朝を再興した際の封禪や郊祭にあったことは明白だ。

『後漢書』「光武帝紀」、「（漢朝再興を遂げた二五年）六月末、皇帝の位に即く。燔燎して天に告げ、六宗に禋し、群神に望す。・ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し・・」

☆「燔燎して天に告げ」は、柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告すること。

『邪馬台三国志』には、弥生早期に水田稲作を始めた天の国が倭国王朝、倭奴国王朝、瑞穂の邪馬台国、天（嚴）之國（倭）王朝、日本朝、和国、大和朝廷の名で、何度も蘇ってきた歴史が物語として仔細に綴られています。視点を変えると、こんな見方のできる歴史でもあった。

★前五〜前四世紀、戦国中国の覇権争いに敗北して、日本列島に逃げ込んだ呉王夫差と越王句踐の子孫らは、邪馬台国末期に至るまで延々と覇権争いを繰り返してきた。結果は、戦国中国の歴史とは正反対に、呉の太伯・呉王夫差末裔の天の国が天下を制して、大和朝廷を築き上げた。

★倭国・倭奴国王朝の再現は、磐余彦火火出見が大和朝廷の初代天皇即位後に、漸く叶った。

★高阜産霊による葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武尊による日高見の蝦夷討伐は、布都御魂の十握劍、射楯神（日矛）、天叢雲劍の威光の下で、兵法極意「戦わずして勝つ」を達成した実話だ。この時代、祭器を振りかざし、刃に血塗らずして勝った者が英雄視されてきた。

倭の女王ヒミコ的一生

天之尾羽張神の宗女、向津姫↓天_之国_の天照大御神、日神

↓倭の女王ヒミコ、葦之御魂天疎向津姫↓天照大御神

1 倭奴国(倭+豊葦原中つ国) 王朝六代女系天神、天之尾羽張神の時代(一六〇年前後〜一八〇年代前半)

一六五年頃、六代女系天神の宗女として糸島平野怡土の天宮(天上の都、平原?)で誕生↓向津姫

※豊受(天照) 皇太神(熊野櫛御氣野、出雲では大穴持、大国主) ↓向津姫に婿入り

婿入り前の皇太神は、伊雑官の巫女玉柱屋姫(瀬織津姫)、尾張海部家のハハツ姫らを妃としていた

※一八〇年代中頃、彼は畿内三輪氏らと組んで謀反し、邪馬台国(瑞穂の葦之国王朝↓ヒミコの天(葦之

国王朝↓火明饒速日の日本朝に発展)を興して天照大神、水天神、倭大物主と語った。これが倭国大乱だ

2 王朝瓦解後、高千穂郷に逃れた高天(日高天_之国、倭と語れず)期(一八〇年代後半〜二二〇年代前半)

天_之国_の天宮、高千穂宮では、天照大御神、日神(七代女系天神)

3 邪馬台国に遷座後の天(葦)之_国(倭国) 王朝時代(二二〇年代前半〜二四〇年代後半)

纏向上之宮では、倭の女王ヒミコ(日継の御子、日の巫女)、撞賢木葦之御魂天疎向津姫

※天照大神妃(天照大神荒魂)の瀬織津姫↓ヒミコの分身(撞賢木葦之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂)

4 女王退位直後の笠縫邑(檜原神社の鎮座地)では、天照大御神

5 伊勢の五十鈴宮では、天照大御神

※笠縫邑と五十鈴宮では、天照大御神が天叢雲剣を依り代にして天照大神を祭祀

6 二四〇年代末、五十鈴宮で逝去↓箸墓円墳部(石積み五段重ね)の円形壇に埋葬された

7 三〇四年二月二三日、鳥見山中の祭場(桜井茶臼山古墳)で、夫と共に皇祖皇宗に配された

※内宮祭神は天照坐皇大御神。荒祭宮祭神は、天照大御神荒魂(撞賢木葦之御魂天疎向津媛命、瀬織津姫?)

元伊勢檜原神社祭神は、天照大神若御魂。元伊勢籠神社奥宮の磐座本宮は豊受大神、西宮は天照大神を祭祀

内宮別宮伊雑官(天照大神の遙宮)祭神は、天照坐皇大御神御魂、相殿祭神は玉柱屋姫命(瀬織津姫?)

ちなみに、廣田神社(西宮市)祭神は天照大御神荒魂

◇本書の王系譜 皇統万世一系↓大乱後、倭国（高天、日前、和国）、邪馬台国、大日本家が並立

180年代前半/大乱 220年代前半 250年頃 301年に大和朝廷樹立

〔倭奴国〕和国
 伊弉諾
 伊弉諾
 伊弉諾

天之尾羽張 向津姫/日神 ○—火瓊瓊杵：火火出見 ○—神武：崇神：応神—仁徳

(天神) (天神) 西都市妻/川内 都城市/霧島市 宮崎市

宮都：糸島市平原 高千穂町 笠沙

〔邪馬台国〕倭女王

宮都： 唐古・鍵 總向上之宮：總向珠城宮/日代宮

(天神) 天照大神—天鹿兎山 垂仁(櫛速日/天火明/火明櫛速日)

(倭王/天神) 景行

(都督/倭王) 成務：仲哀・神功

〔大日本王〕 綏靖—孝靈—孝元—開化—崇神

宮都： 大倭の葛木 黒田 堺原 春日 磯城瑞籬宮

◇伊弉諾夫妻の実子 伊弉諾の主な養子と人質、伊弉冉分身、伊弉冉の主な養女

伊弉諾 (人質) 少童(海神)三神、筒男(住吉)三神ら

伊弉諾 (養子) 向津姫(日神の天照大御神↓ヒミコ)、豊受皇太后(↓天照大神)、素戔鳴、大海神ら

伊弉冉 (実子) 日子(蛭児↓蛭子、天事代主)、火軻遇突智(↓火産靈)

伊弉冉 (養女) 大宜都比売、丹生都比売の埴山姫(埴山姫、大宜都比売襲名↓大氣津比売↓埴山姫)、

(伊弉冉分身) 白山の神、菊理媛 / 岡家女、稚産靈(豊受姫の母、日神分身の稚日女↓丹生都比売襲名)

《著者紹介》

昭和十八年、神戸市に生まれる。昭和四十三年、神戸大学工学部建築学科卒

一級建築士。平成元年三月（吉野ヶ里遺跡発表の一週間前）以来、三十余年来の古代史研究家。

《著書》

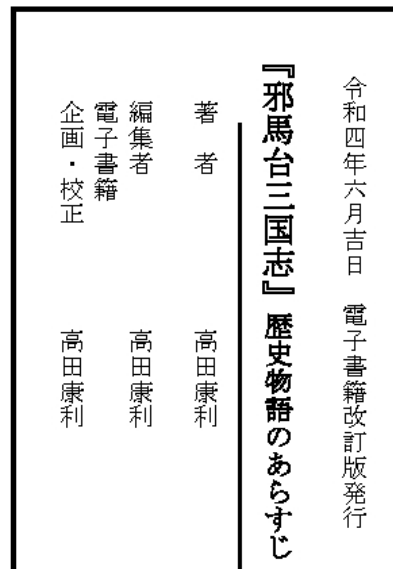
『新ヤマト・出雲、邪馬台の三国志』（平成六年、新人物往来社刊）

《電子書籍》（book☆walker、楽天kobo、Kobo-puboo、アマゾンkindle）

『邪馬台三国志』歴史物語編、『邪馬台三国志』

『邪馬台三国志』ダイジェスト版、『邪馬台三国志』解説編

『ヤマト・出雲、邪馬台の三国志』復刻版



『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ

著 高田康利

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
